

商いの新しいものさし

第23回

倭商い創造研究所
代表取締役 松本 大地

ライフスタイルを豊かにするシネマ・カルチャーの台頭

シネコンと呼ばれる複合映画館、シネマコンプレックス、ショッピングセンター(S.C.)の急増とともに増え続けた結果、全体の事業性が落ち込み淘汰される館も目立ってきた。

画館がすべて閉館となった。しかし、翌年になると天文館地区を構成する商店街が主体となり、再び映画を復活させようとする動き出し、今年5月に開業したのが「天文館シネマパラダイス」である。

南九州最大の都市である人口60万人の鹿児島市には、天文館という繁華街がある。1960年代の全盛期には映画館が16館もあったことで、天文館は映画の街と呼ばれたが、映画産業の斜陽化や映画を鑑賞するスタイルが変化し、また駅ビルや郊外の大型S.C.にシネコンが開業したことで、2006年には天文館の映画館がすべて閉館となった。

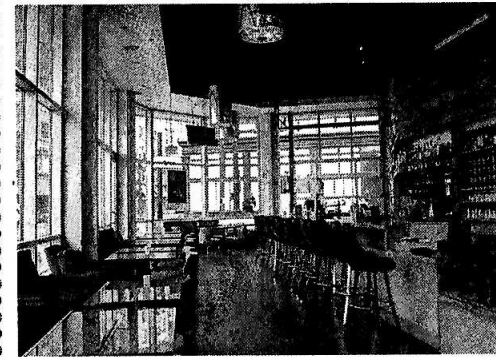
実質の数字はかなり厳しい状況と地元マスコミでも報道され、エンターテインメントの多様化や市場動向を見極めずに進めたシネコン事業が社会問題になりつつある。

一方、天文館シネマパラダイス開業の1年前に同じ天文館でオープンしたのが、鹿児島三越店撤退後に大幅改装した「マルヤガーデンズ」である。百貨店業態を刷新し、コミュニティ、アート、デザインの切り口で再生させた複合商業施設には、ガーデンとネーミングされた複数のコミュニティスペースが設けられ、そのひとつがガーデンズシ

ネマという39席のコミュニティシネマである。地域で映画を愛するメンバーによる会員組織で運営され、すでに1000人を超える会員を有している。日本で一番小さな映画館」といわれるも、逆に送り手の運営サイドと鑑賞する側とのふれあいを楽しめる距離感を活かしている。上映作品と連動したイベントも

多く、例えば原子力を考える映画を上映した際は、原子力エネルギーの討論会を開催し、太鼓を題材にした映画を上映した際は、太鼓の先生とのワークショップが行われるなど、新しいコミュニティシネマの在り方を示唆している。

さて、第3の映画業態として紹介したいのが、米国オレゴン州ポートランド中心部にある「リビングルーム・シアター」である。自宅のリビングルームにいるような感覚で映画を鑑賞するというコンセプトで作られ、38席から65席の6スクリーンで複合されたミニ・シアターである。



④街の宝石箱のようになりビングルーム・シアターの存在
⑤併設されたオシャレなレストラン・バー

特筆すべき点は、洗練されたレストランが併設され、館内でもひじ掛けやテーブル付きのゆったりしたシートでドリンクや食事が楽しめること。また、仲間同士だけの貸し切りプライベートシアターや、ライブコンサートでも利用されている。シネコンというと、大きな面積や多額の事業費が必要と思われるが、この複合ミニ・シアターならば100〜150坪のスペースで設置が可能であり、日本の中心市街地でもシネマコンプレックスやコミュニティシネマとは違つ、新しい映画のライフスタイルシーンが創出できよう。

映画とライフスタイルの関係性を重ね合わせるなど、どのようなマインドを持った館であり、どんな時間や楽しみを享受できるのかのものを保持つことで、シネコン、コミュニティシネマ、そしてリビングルーム・シアターそれぞれの価値が発揮される時代となった感がある。

映画とライフスタイルの関係性を重ね合わせるなど、どのようなマインドを持った館であり、どんな時間や楽しみを享受できるのかのものを保持つことで、シネコン、コミュニティシネマ、そしてリビングルーム・シアターそれぞれの価値が発揮される時代となった感がある。